30amS-058

華岡青洲の麻沸散に使用された蔓陀羅華に関する一考察

◯船山　信次[1]（[1]日本薬大）

［**目的**］中国古代の華佗（かだ）が考案した全身麻酔薬を再現しようとした華岡青洲（１７６０～１８３５）によって調製された麻沸散（別名：通仙散）に配合されている蔓陀羅華の正体について考察を加える。

［**方法・結果**］江戸末期の佐藤玄達（１７９２～１８５９）の薬箱が岩手県一関市博物館に収蔵されている。この薬箱は宮城県石越町で医院を開業しておられる佐藤良友氏所蔵。佐藤良友氏は代々続いている医家の７代目にあたり、佐藤玄達はその２代目である。佐藤玄達は仙台藩の藩医の大槻玄沢の芝蘭堂や華岡青洲の春林軒などに学んで１８１７年に帰郷し、石越町で医塾を開いて多くの門弟を育てたという。五段重ねの薬箱の最下段には麻沸散の処方に使用されたといわれる蔓陀羅華関係生薬の蔓多（陀）羅實があり、他の麻沸散推定配合生薬の存在とともに東京理科大学の中村輝子氏らにより報告されている。この紙包みには安五年とあり、これが安政５年（１８５８年）とすれば、佐藤玄達の最晩年である。

　この蔓陀羅實を詳細に観察するとともに、チョウセンアサガオの栽培品と比較したところ、まだ口を開かない未熟果実を鋭利な刃物で刻んだものと結論した。

［**考察**］チョウセンアサガオからは全草よりアトロピンやスコポラミンが得られる。よって、どの部位を使ってもこれらのアルカロイドの作用は期待できるが、今回の調査研究により、麻沸散には、チョウセンアサガオの花弁ではなく、口を開く前の未熟果実を刻んで乾燥させたものを使用した可能性が高いと結論される。

［**謝辞**］貴重な資料を拝見する機会を作ってくださいました一関市博物館学芸主事の相馬美貴子氏、および、種々御教示をたまわりました石越町の今堂医院院長佐藤良友氏に深謝します。